



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「命婦のおとど」か「おもと」か：『枕草子』「上に候ふ御猫」の呼称をめぐって
Author(s)	後藤, 康文
Citation	国語国文研究, 154, 46-51
Issue Date	2020-03-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89711
Type	journal article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_154_46-51.pdf



「命婦のおとど」か「おもと」か

——『枕草子』「上に候ふ御猫」の呼称をめぐる——

後 藤 康 文

一 「おとど」か「おもと」か

長保元（九九九）年九月十九日、毒舌家藤原実資の尖った批判の矛先は、一条天皇の愛猫、その出産をめぐる尋常ならざる待遇へと、容赦なく向けられた。

十九日、戊戌、日者内裏御猫産子、女院・左大臣・右大臣有産養事、有衝重・堽飯、納菴之□云々、猫乳母馬命婦、時人咲之云々、奇怪之事天下以目、若是可有徴坎、未聞禽獸用人禮、嗟乎

（大日本古記録『小右記』二一・六一頁）

そして、こうした状況が引き金となつた哀れな「翁まろ」事件の発端を、清少納言はこう書き記している。明くる長保二年三月中旬ごろの話と思われる。

上に候ふ御猫は、かうぶりえて、命婦のおとど⁽²⁾とて、いみじうをかしければ、かしづかせたまふが、端に出でて臥したるに、乳母の馬命婦、「あな正無や。入りたまへ」と呼ぶに、日のさし入りたるに、ねぶりでゐたるを、おどすとて、「翁まろ、いづら。命婦のおとど食へ」と言ふに、まことかとて、痴れ者は走りかかりたれば、おびえまどひて、御簾の内に入りぬ。

（『枕草子』「上に候ふ御猫」の段／第七段・三八頁一四行―三九頁五行）

さて、右の傍線部に示された「命婦のおとど」こそが、何を隠そう、一条天皇が溺愛した「御猫」の呼び名にはかならないのだけでも、その敬称部分「おとど／をとど」に関する『枕草子』本文の様相を確かめると、三卷本系統・能因本系統ともに諸本「おとど／をとど」で一致しており、古活字十三行本や慶安刊本も含めて異

同は認められない。⁽⁴⁾ そうであつてみれば、小論がテーマに掲げた問題はそもそも存在しないことになり、これに考察を加える余地などどこを探してもないかに見える。

にもかかわらず、「おとどは、もし、おもととのあやまりにや」。「おほかた、女房をばおとどとはいはじ。おもとといふがつねのことなり」。「もの字ととの字、いとまぎれやすき仮名なれば」。「おもとを、おとどに書きあやまれるならむ」。「も」と「と」の仮名、いとうふ似たれば」。「おどどは、おもととのあやまりなるべし」……という得体の知れぬ囁きが、どうしても耳から離れない。そこで、「などかわりなきことをばしきりてのたまふらむ。いとせむかたなうかひもはべるまじきに」と思いつつも、さらに調べを進めてみると、この天の声を「幻聴」として一蹴するのがためらわれる火種が、『枕草子』注釈史の中に厳然と残されていることが判明したのだ。

さっそくその「火種」を、箇条書きにして紹介しよう。

i 加藤磐斎の著作とされ、その没年である延宝二（一六七四）年に出版された注釈書『清少納言枕双紙抄』の当該本文が「命婦のおもと」であり、標註欄において「おもととハ、内侍ト書ておもと、よむ也。侍の字をも長恨哥におもとひと、よめり」（九州大学図書館音無文庫蔵本）と説明している点。⁽⁵⁾

ii 同じく延宝二年に刊行され、以後圧倒的多数の読者を獲得することになった北村季吟の『枕草子春曙抄』が、本文「おとど」の横に「イおもと」の傍記を有しており、標註欄において「イ命婦のおもとと侍者（さむらい）と書民部のおもとと、空蟬巻に云々」（早稲田大学図書館九曜文庫蔵本）と述べている点。

iii 『清少納言枕双紙抄』の強い影響を受けて成立した岡西惟中著『枕草子旁注』（天和元（一六八一）年）も、本文を「おもと」に作り、「侍也」という傍注を付している点。⁽⁶⁾

iv 注（2）ですでに書名を出した石田穰二氏の『角川（ソフィア）文庫』が、i～iiiの残像があつたからなのか、本文は二箇所ともに「命婦のおとど」のままでありながら、それに対応する現代語訳を「五位の位を頂いて命婦おもとと呼ばれて」「この悪い子の命婦のおもとを囁んでやりなさい」（二二七頁）としている点。この事情は、同書の前身である松浦貞俊・石田穰二訳注『角川文庫 枕草子』上巻（角川書店、昭四〇初版）でもまったく同じ。

それでは、こうした事実を踏まえたくうえで、やはり「おとど」でよいのか、それとも「おもと」の方がまさかの正解なのかについて、以下しばらく愚考をめぐらせてみたい。

二 女房に対する敬称としての「おもと」

はじめに、同僚の女房等に対する敬称としての「おもと」の用法とその意味合いを確認しておこう。まずは『枕草子』の三例から。

・つとめて日さし出づるまで、式部のおもとと小廂に寝たるに、奥の遣戸をあけさせたまひて、上の御前、宮の御前出でさせたまへば、起きもあへずまどふを、いみじく笑はせたまふ。

（『職の御曹司の西面の立部のもとにて』の段／第四十七段・一〇六頁一二行～一五行）

・爪はじきをしありくが、いとほしければ、

うは氷あはに結べる紐なればかざす日かげにゆるぶばかり
を

と弁のおもとといふに伝へさすれば、消え入りつつえも言ひやらねば、「なにとか、なにとか」と耳かたぶけて問ふに、すこし言どもりする人の、いみじうつくろひめでたと聞かせむと思ひければ、え聞きつけずなりぬるこそ、なかなか恥隠るる心地してよかりしか。

〔宮の五節出ださせたまふに〕の段／第八十六段・一二二頁二行～一〇行

・一条の院に造らせたまひたる一間の所には、にくき人はさらに寄せず、東の御門につと向ひて、いとをかしき小廂に式部のおもとともろともに、夜も昼もあれば、上も常に物御覧じにいらせたまふ。

〔成信の中將は、入道兵部卿宮の御子にて〕の段／第二百七十四段・四二四頁五行～八行

これらは、主体との間に隔たりのない女房（「式部のおもと」）、もしくは、さしたる敬意を払う必要のない女房（「弁のおもと」）に対するいわばカジュアルな敬称であつて、現代語の「さん」に相当する。さらに、同じ『枕草子』中の、

・殿上人、宰相などを、ただ名のる名を、いささかつましげならず言ふは、いとかたはなるを、清うさ言はず、女房の局なる人をさへ、「あのおもと」「君」など言へば、めづらかにうれしと思ひて、ほむる事ぞいみじき。

〔文ことばなめき人こそ〕の段／第二百四十四段・三七六頁九行～一二行

という記事の波線部からも、「おもと」とは、「君」同様女房階層の女性に対するごく軽い敬称であつたことが逆説的に知られるのである。

ついで、『源氏物語』の「おもと」の、通常の用例をいくつか挙げてみよう。

・民部のおもとなめり。けしうはあらぬおもとの丈だちかな」と言ふ。
（空蟬巻／①・一二七頁一三行～一四行）

・例語らふ中將のおもとの曹司の方に行くも、例の、かひあらじかしと嘆きがちなり。
（竹河巻／⑤・八四頁六行～八行）

・客人は、弁のおもとと呼び出でたまひて、こまかに語らひおき、御消息すくすくしく聞こえおきて出でたまひぬ。

（総角巻／⑤・二四一頁八行～一〇行）
・起き上がりて、「似るべき兄やははべるべき」と答ふる声、中將のおもとか言ひつるなりけり。

（蜻蛉巻／⑥・二七一頁一三行～一五行）
これらはすべて、実質的な敬意をほとんど含まない形式的敬称とでもいうのがふさわしい。

なお、『源氏物語』の用例中、

・劣り腹なれど、明石のおもとの産み出でたるはしも、さる世になき宿世にて、あるやうあらむとおほゆかし。

（常夏巻／③・二三七頁八行～九行）
のみは、時の内大臣が、明石の君のことをたかが召人風情がと

皮肉った特殊なケースであって、

・御召人だちて、仕うまつり馴れたる木工の君、中將のおもとなどいふ人々だに、ほとにつけつつ安からずつらしと思ひきこえたるを
(真木柱巻／③・三六〇頁二行～四行)

と語られる「中將のおもと」とらと同等の身分にまで彼女を貶める、屈折した表現と解釈される。

ともあれ、はじめに紹介したように「命婦のおもと」なる異文が現実に発生した原因は、「と(止)」と「も(毛)」の字体酷似もさることながら、「上に候ふ」分際＝女房に対する敬称としては「おもと」が一般的であったという、まさにこの点にあったものと思われるのである。

三 女房に対する敬称としての「おとど」

一方、女性の敬称としての「おとど」は、たいてい次のような使われ方をする。

・尚侍のおとど、御車五つばかりして参りたまへり。

(『うつほ物語』蔵開巻／②・三三五 頁三三行)
・いと面白うをかしき所に率てたまつてむ。尚侍のおとどはおはししなむや

(楼の上上巻／③・四六八頁一五行～四六九頁一行)
・「さりとて明石の列には、立ち並べたまはざらまし」とのたまふ。なほ北の殿をば、めざましと心おきたまへり。

(『源氏物語』玉鬘巻／③・一二六頁九行～一一行)

・「いな、これはかたはらいたし」とのたまへど、北の殿のおほえを思ふに、すこしなめなる心地して、文書きたまふ。

(野分巻／③・二八三頁三行～五行)
・なほ南の殿の御心用ゐこそ、さまざまにありがたう、さては、この御方の御心などこそはめでたきものには見たてまつりかはべりぬ

(夕霧巻／④・四七〇頁一三行～四七一頁一行)
・三の君、二郎君は、東の殿にぞとりわきてかしづきたてまつりたまふ。

(同／④・四八九頁一三行～一四行)
これらの用例のうち、『うつほ物語』の「尚侍のおとど」はいうまでもなく藤原兼雅の妻俊蔭の娘、『源氏物語』の「北の殿」は明石の君、「南の殿」は紫の上、「東の殿」は花散里をそれぞれ指しており、こうした場合における「おとど」という語が、いずれもしかるべき社会的地位を獲得した奥方に対する「様」ほどの敬称として機能していることがよくわかる。したがって、このような用法は「上に候ふ」分際に対するそれとおのずから性質を異にすることになるため、ここでは峻別して除外されなければならないのである。

今肝心なのは、「上に候ふ」分際＝女房に対する敬称としての「おとど」の方なのだが、実際その用例は少ない。そうした中で、女童から女房に対して使用された、

* 昼つ方、小さき童、緑の薄様なる包文のおほきやかなるに、小さき髭籠を小松につけたる、また、すくすくしき立文とりそへて、奥なく走り参る、女君に奉れば、宮「それはいづくよりぞ」とのたまふ。「宇治より大輔のおとどにて、もてわづらひはべりつるを、例の、御前にてぞ御覧ぜんとて取りはべりぬ」と

言ふもいとあはたしきけしきにて

『源氏物語 浮舟卷／⑥・一〇九頁七行～一一〇頁一行』

などは、この用法の特徴が端的に知られる例だといつてよい。

要するに、この種の「おとど」とは、主体との間に隔たりのある女房または、しかるべき敬意を払う必要のある女房に対するフォーマルな敬称なのであって、およそ現代語の「様」に相当する接尾語的表現と解せるのである。

四 「上に候ふ御猫」の正しい呼称とその真意

以上、問題となる両語は、敬意の度合・主体との距離という二つの観点からして、

でも、
×おとど＝おもと

でもなく、
×おとどⅣおもと

○おとど▽おもと

の関係にある、との順当な結論が得られた。となれば、一条天皇の愛猫の呼称は、やはり、「命婦のおとど」でなければならぬ。泰山鳴動して猫、否、鼠一匹と笑うこと勿れ。大事な理由は、その理由なのである。

すなわち、畜生の分際でありながら叙爵に預かり、内命婦待遇となった「御猫」に、「命婦のおとど」なるものものしい名前を付けたのは、一条天皇その人ではなく、おそらくは主上付きの女房た

ちだったと考えられ、そこには、「御猫」に対する彼女たちの複雑な心情が露骨に表現されていたとみられるのだ。冒頭に引いた実資の口吻を思い起こせばなおさらのことだが、「命婦のおとど」とは、とうてい素直な呼び名とは解釈しがたいのであって、常軌を逸した帝らの処遇を決して愉快に思っていない人々の、精一杯の皮肉が込められた特異な「敬称」とみななければならぬまい。

だからこそ「彼女」は、親近感をともない、かつ分相応の「命婦のおもと」ではなく、敬して遠ざける体の「命婦のおとど」とあえて命名されたのではなかったか。この現象は、第二節で触れた「明石のおもと」なる「蔑称」の使用と表面上対照的に見えるのだけれども、裏に潜む憤懣や蟠りにそれぞれが因って出た表現である点において、両者の根っこは一緒だと考えてよいだろう。

それにしても、馬・命婦もとんだ「大役」を仰せつかったものである。その胸中を察するならば、日向で呑気に昼寝をしていた「お猫様」の様子を見かねて、お灸を据えるためにたまたまそこにいた犬をけしかけたくなったというのも、実に自然な衝動であつたと評せよう。たとえその軽率な言動が、例の事件を引き起こす結果に繋がったとしても、である。

注

(1) 以下、小論における『枕草子』（三卷本）本文の引用は、松尾聰・永井和子校注・訳『新編日本古典文学全集 枕草子』（小学館、平九）に、また、『うつほ物語』『源氏物語』からの用

例引用も同じく『新編日本古典文学全集』に拠る。

(2)

三卷本諸本「にて」。「江」↓「仁」の誤写とみて「えて」「得て」に改めた。能因本「給て」。ちなみに、石田穰^二詠注^一『角川(ソフィア)文庫 新版枕草子』上巻(角川書店、昭五四初版/KADOKAWA、平二八第四十五版)が、本文を「かうぶり得て」と改訂し、「五位に叙せられること。『得て』は三卷本抜書本による。三卷本「にて」。能因本「給(たまはり)て」。(二四頁・脚注七)」と述べており、津島知明・中島和歌子編『新編 枕草子』(おうふう、平二二初版)も、同断の措置を講じている。萩谷朴『枕草子解環』第一巻(同朋舎出版、昭五六)は、「カウブリを、動詞カウブルの連用形、ニテを完了助動詞ヌの連用形ニと接続助詞テとの連語と見れば」、三卷本現「本文のまままで、何らの疑惑は残らないはずである」(八六頁・解環)との認識のもと、「叙爵していて」と訳しているが、従うべくもない。

(3)

底本「校訂付記」欄(四七〇頁)に、「命婦のおとど(能)——命婦おと、「タダシ」の「字ハ官職表記ノ常トシテ、書カレテイナクテモ補ッテヨム、アルイハ、「命婦おとど(命婦殿)」トヨムベキカモシレナイ」とある。

(4)

杉山重行編『三卷本枕草子本文集成』(笠間書院、平一一)二四頁、田中重太郎『校本枕草子』上巻(古典文庫、昭二八)二八頁参照。なお、この章段は前田本にはない。

(5)

川瀬一馬校注・現代語訳『講談社文庫 枕草子』上・下二冊(講談社、昭六二第一刷)は、この書物を底本に選んだ注釈書

で、傍線部本文・現代語訳ともに「命婦のお許^も」(上・二六頁／二三〇頁～二三二頁)。

(6)

『日本文学古註釈大成 枕草子古註釈大成』(日本図書センター、昭五三)三四頁。

(7)

たとえば、小論が『源氏物語』の用例掲出にあたって便宜利用した『新編日本古典文学全集』は、この表現について「明石の君。『おもと』は、女房程度の女性に対する敬称。上の「劣り腹」とともに」、内大臣の「源氏への悪口である」(頭注三二)としている。光源氏の下風に立つ内大臣の鬱屈した心理が、明石の君を指して「明石のおもと」といわしめたわけである。

(こ)とう やすふみ・北海道大学大学院文学院教授